

*Ostericum grosseserratum* (Maximowicz) Kitagawa from every point of view, as noticed by Pimenov in 1968. Therefore, as above mentioned, the plant hitherto called *O. koreanum* by Japanese botanists is a new species allied to *O. Sieboldi* (Miquel) Nakai (= *A. Miqueliana* Maximowicz). According to the description and figures of *A. Miqueliana* written by Gorovoi, its fruits are more flattened with broader lateral wings and vittae are 2-3 in each vallecula 4-6 in commissure. In Manchuria, the genuine *O. Sieboldi* grows in the southern parts only.

○ 牧野標本館の 2-3 のホシクサ属植物 (佐竹義輔) Yoshisuke SATAKE :  
Some pipeworts in the Makino Herbarium

牧野標本館所蔵のホシクサ属植物はかなりの量(約 1000 点)にのぼるが、標本の貧弱なもの、採集者不明のもの、採集者の明記はあっても産地のないもの、または不確かなものなどがあるのは残念なことである。しかし、牧野先生自身の採集したものはさすがに立派なものである。調査して 2-3 注意すべきものを記録しておきたい。

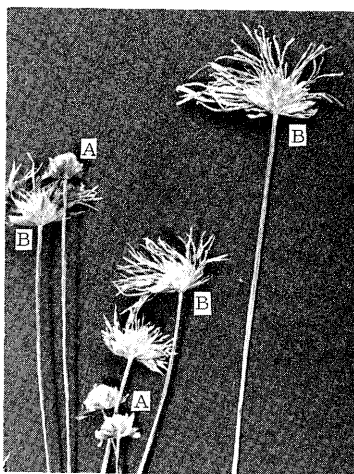
1. タカノホシクサ *Eriocaulon cauliferum* Makino. 日本産唯一の長茎種で、群馬県多々良沼が唯一の産地であった。あったというのは戦後はムジナモと同じように絶滅してしまったようである。牧野標本館にはよい標本が 15 個体ある。いずれも高野貞助採集で、8 個体には邑楽郡多々良沼、1910 年 9 月 15 日のラベル、7 個体には上州館林多々良沼 1911 年 8 月 15 日のラベルがついている。どちらかがタイプであろうかと原記載(植物学雑誌 24 巻 165-167 頁, 1910)に当たってみると、引用標本は 1909 年 8 月 10 日高野貞助採集であった。この標本は東大腊葉庫にあると思うが、まだ確かめていない。北村・村田・小山の原色日本植物図鑑草本編 III, 178 頁(1964)に、*E. setaceum* L. に近いとあるが、筆者はむしろ *E. intermedium* Koern. に比すべきものとする。

2. ゴマシオホシクサ *Eriocaulon senile* Honda 牧野先生が 1940 年 10 月 29 日に安芸宮島で採集した立派な標本が 20 個体ばかりある。タイプは肥後(にしぜ)で前原勘次郎採集(1927)のもので、その後分布は四国、本州とひろまったが、静岡県以東にはまだ記録がないようである。ところが、牧野標本館には包紙に武蔵橘村 1906 年 4 月と書かれた標本(採集者不明)が 2 個体ある。橘村というのは現在の何処であるかわからないが、もし標本の入れ違いでなければ、新産地とみななければならない。

3. イトイヌノヒゲ *Eriocaulon decemflorum* Maxim. の奇形品。イトイヌノヒゲははじめ種として記載され(*E. nipponicum* Maxim.), 後にコイヌノヒゲ *E. decemflorum* Maxim. の変種と考えられ(*E. decemfl.* var. *nipponicum* Nakai) するようになり、筆者もそれに従ってきた。しかし、きわめて変化に富み、環境によって

小さくもなり、大きくもなるので、現在では区別することもないと思っている。便宜上、高さ 10 cm 内外で頭花の花数の少ないものをコイヌノヒゲ、高さ 20-30 cm、頭花の花数の多いものをイトイヌノヒゲと和名で区別するくらいのものであろう。牧野標本館に、多数の標本があるが、中に、美作、日本原野 (Nippon Genya) 1908 年 9 月 23 日のラベルのついたイトイヌノヒゲの標本が 8 包 16 個体ある。いずれも成育が良好で大株になり、頭花数が 100 個をこえるものもある。そのなかの 5 個体は、正常頭花の他に数個の異常頭花をつけているのを見出した。その比は、A 株では、ca. 150:12, B-C 株では ca. 120-130:3, D-E 株では ca. 80-100:2 である。

この異常頭花 (写真) は、その直径が正常頭花の 2-3 倍あり、総苞の内側に長い葉状物があって、毛槍を立てたような外観を呈する。はじめは、無性芽でもできたか、あるいは種子が発芽したいわゆる *viriparous* になったものかと思い、解剖してみると、そうではない。長い葉状物は花苞がいちじりしく伸長して花の数倍長くなったものである。花部には大した変化は見られないが、花柄も雌しべの柄も正常花のものよりやや長くなり、雄花のがくは基部まで 2 深裂していることがわかった。一応新奇形品としてケヤリイトイヌノヒゲ *E. decemflorum* f. *aberans* の名を用意したが、何かの原因による偶発的な現象とも考えられるし、さらにくわしい研究をしなければ決定的なことは云えない。ここではこのような奇形品があることを記録しておくにとどめる。



ケヤリイトイヌノヒゲ (×2/3). 同一株からでた正常頭花 (A) と異常頭花 (B).

4. オオホシクサ *Eriocaulon buergerianum* Koern. 包紙に小笠原 1915 と書いた 1 個体のオオホシクサがある。この種は、本州中部以西、四国、九州、琉球、台湾、中国に分布しているもの。小笠原島からはこの属のものの記録がないので、もしこれが真実なら新記録であろうが、小笠原のどこの島か、採集者の明記もないので、公式の記録になり得ないのは残念である。

5. クロホシクサ *Eriocaulon parvum* Koern. 沖縄島金武、1909 年 10 月 23 日採集の標本が 1 個体ある。採者の明記はないが琉球からの新記録である。

(浦和市 [redacted])